

改めて「家庭愛和」を考える

上 廣 哲 治
うえ ひろ てつ じ

創立七十周年記念式典で、名誉会長は地域再生が成功した例をもとに、わが会の「改革」を成功させるための心構えを示されました。

そこで今月から、わが会の柱となる教えをどのように実践に結びつけてゆけばよいのか。また「改革」、つまり「意識改革」と「実践改革」を、どのように進めてゆけばよいのか。そのことを、わが会の実践の鍵となる言葉から、皆さんと考えていきたいと思ひます。

最初に取りあげるのは「家庭愛和」です。なぜ「家庭愛和」が最初かといえは、わが会が理想とする「我も人もの仕合わせ」を実現するには、まず何よりも、社会の基本単位である家庭の仕合わせを実現させなければならぬからです。私たちが求める「仕合わせ」を最初に実現できる場、それは家庭です。ですから「家庭愛和」は、実践倫理の最初の目標であり、また究極の目標なのです。

家族一人ひとりが自分の家族を愛し、家庭での自分の役割をしっかり果たす。そうしてもたらされる和やかで調和した状態、豊かで愛に満ちた状態。それが「家庭愛和」です。

しかし現在、家族を取り巻く環境は決して明るいものではありません。親の収入の多寡たかによって生まれる子どもの教育格差、虐待や引きこもり、介護、離婚による母子・父子家庭の増加など、難問が山積しています。少子高齢化で家族の人数は減り、結婚しない人の数も増えています。家族そのものが困難な時代にあるといえるでしょう。

「家は寛げる場でなくなった」という声を、最近よく耳にします。あるお父さんは、夜遅く会社から家に帰ると、子どもの成績や夫の地位や収入でストレスをためた奥さんから、細かなことで苦勞を聞かされて困る、と嘆いていました。彼は、自分が非力で妻や子どもに肩身の狭い思いをさせているのではないか、と言います。それでも、自分なりに精一杯やっているのだから、せめてその頑張りは認めてほしい、と。

子育て中の家庭では、このような妻の不満、夫の嘆きは珍しくありません。なぜ家庭から寛ぎが消えてしまったのでしょうか。私は、社会の価値観が家庭の中に入り込みすぎたためだと思います。こういうことです。社会では、例えば製造業であれば、モノをいかに速く安くつくるかが問われます。ですから、企業ではそうした能力に長けた人が高い評価を受けます。それが「社会の物差し」です。

「家族の物差し」は違います。夫なら夫が、妻なら妻が、子どもなら子どもが、そこにいてくれるだけで価値を認めるものです。出世できなくても、収入が多少低くても、夫が明るく元気でいてくれさえすればいい。子どもは元気でいてくれれば、いや、どのような状態にあっても、そこにいてくれるだけで仕合わせだ。これが家族の物差しです。

私たちには、このように無条件で自分を認め、受け入れ、大切にしてくれる人が必要なのです。そういう人なしに、人は仕合わせに生きることができないのではないのでしょうか。自分の存在を認めてもら

うことで、子どもは自尊感情を育むことができ、安定した心身が育つのです。存在を無条件に承認する。それを「愛」と呼んでもいいでしょう。「家庭愛和」は、利益や効率を追求する功利的な社会の物差しとは別に、家族の物差し、つまり愛の物差しによって成り立っているのです。だから家庭は、夫も妻も子どもも、皆が安心して和やかに寛げる場になっているのです。

「戦場のメリークリスマス」などで国際的にも評価が高い、映画監督の大島渚おしまなげさんは、病で二回倒れ、三年前に亡くなりました。二回目に倒れた際には、集中治療室で生死の境をさまよい、幸い命はとりもめたものの、寝たきりで自分では何もできません。妻で女優の小山明子さんは、夫の介護に本気で向き合う決意を固めました。

ところが、小山さんには、介護はもちろんな家事の経験もありません。しかし、「ベッドに横になったままで動くこともできず、辛い思いをしているのは大島だ。彼を支えるのは自分しかない」と考え、妻としてやれることはすべてやることにしましたといいます。こうして小山さんは、献身的な介護を十二年間、監督が亡くなるまで続けました。

このように書くと、小山さんが無償の愛で監督を支え、監督はただ介護されるだけだったように思えるかもしれませんが。しかし、小山さんは語っています。「私が（監督を）支えているようだけれども、じつは逆で、彼が生きていてくれるから私も元気でいられたのです」と。監督は寝たきりですから何もできません。家族に対して何の貢献もできないように見えます。しかし、そんなことはありません。監督は、ただそこにいるだけで、生きていてくれるだけで、小山さんはじめ家族全員を元気にすることができていたのです。家族とはそういう関係なのです。「いつもあなたを、家族みんなが見つめている」。

これが家族の物差し、愛の物差しなのです。

私たちは忙しい日常生活をおくっています。その忙しさが、ともすると家族一人ひとりの有り難みを見失わせているようです。だからこそ、「あなたを見つめている」という愛の物差しで、家族一人ひとりがかけがえのない存在であることを、改めて深く胸に刻んでいただきたいのです。

ところが、現実はどうでしょうか。妻が話しかけても、仕事で疲れた夫は、寝転がってテレビを観ながら気のない返事をするばかり。「長年連れ添っているのだから、いちいち言葉にしなくても……」。しかしそれは、あなたの単なる思い込みです。長年連れ添ってきたからこそ、あなたが分からなくなっているかもしれないのです。問いかけには、きちんと向き合って、しっかりと相手の目を見て応えるのです。子どもに対しても同じです。寝転がったまま下から見上げたり、立ったまま上から目線で応えたりするのではなく、子どもと同じ目の高さで、目を見て応じるのです。そうした家族の物差し、愛の物差しに守られた人は、家族であることの大切さが再確認できるはずです。

そこで、「家庭愛和」実践の第一歩として、「話をするときは相手の目を見ること」をご提案します。このことを、意識して実践されている方は多くないのではないのでしょうか。相手の目を見ることは、「私はあなたに心を開き、信頼と好意を寄せています」「あなたはかけがえない存在です」と伝えることです。相手も、「この人は誠実に、真剣に、私と向き合おうとしている」と感じてくれるでしょう。

目を見ながら話すことは、目を合わせず言葉尽くすよりずっと深く心を伝えられるのです。「目は口以上に物を言う」のです。ご家庭や職場はもちろんのこと、皆さんの会場や普及先でのご自分の姿も、あわせて点検していただきたいと思います。